
小さな僕たちの部屋

河瀬 シン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さな僕たちの部屋

【Nコード】

N0877A

【作者名】

河瀬 シン

【あらすじ】

今も続く切ない思い。女性を尊敬しながらも本気になれない男が初めて本気で惚れたのは年上の女性。友達、相談、二股、本気、裏切り。二年前の自分を語るノンフィクションラブストーリー

t a l e o : いつか読んでくれたなら

今はただ切なさだけが胸を支配してしまっている。
どうすればいいだろうか？

諦めればいい。

そんなことは分かっている。

ただ理解していても納得できない自分がいるから…。

現在に続く過去の時間が俺を変えた。

時間は今から二年前。

大学に入って一ヶ月後くらいだろうか。

小遣いのもらえなくなった俺がバイトを始めるところから始まる。

少しずつ書き溜めるから、いつか彼女に読んでもらいたい。

table 1: 遅い面接

「うわぁ、またコンビニ駄目だったよ…」

「あんたの探す時期が悪いわ。普通はもっと早くから探すもんだって」

母さんの言うことはもっともだった。

なんたつて今は五月。大学が始まってもう一ヶ月もたっていた。

「あ、でも新聞の折込の広告にバイトの募集とかあるから見てみなさいよ」

「広告？そんなところにあるの？」

「新聞読まないからアンタが知らないだけ。さっさと動くの」

「へえい」

正直乗り気がしなかった。

広告を出すところなんて力仕事かもの凄い大手で大学に行きながらなんて無理だと思ったんだ。

納戸に仕舞つてあるここ数日の新聞を漁る。

新聞：パチンコ店：印刷所：引越屋：アイスクリーム…

「アイスクリーム!？」

突然現れた二色刷りの広告にカチリと何かがハマった。

アイス屋ならキツくないだろうとか田舎にしては自給がいいとか自分が甘いものが好きだとか、とにかく色んな事が噛み合った。

「電話借りる！」

携帯代すら払えなくなっていた俺は家電を持って自分の部屋へ走った。

喉が張り付く。

粘ついた口の中が不味い。

今の時間なら電話しても大丈夫だよな…。

アイス屋なら怖い感じの人いないよな…。

いろいろな事に頭を巡らせながら広告の番号を押していく。

ブルルルルウ　ガチャッ

『ありがとうございます、アイス屋（某有名店）です』

「あ、もしもし。バイト募集の広告見て電話したんですけどまだ大丈夫ですか？」

『はい、大丈夫ですよ。今担当の者に代わりますから少々お待ちください』

可愛い声だった。

まあ顔と声なんて比例した例がないからな。

しばらくするとテンションの高い声で店長らしき女性が電話を交代した。

住んでいる所や学校、年齢幾つかそのテンションのまま質問された。

『そうだ、名前聞くの忘れてたわね。教えてくれる？』

「はい、シンペイです」

『シンペイクンね。それじゃあさっき言った日に面接来てね』

ガチャンと少し不快な音で電話が切れる。

「ふう、しんどいなあ」

電話は苦手だ、相手の顔が見えない。知らない相手だと余計にだ。まあいいや。とりあえず初めて面接のアポ取れたし大丈夫でしょう。まともに働いたことも無いくせにだこか凄く樂觀して面接の日を待った。

アイス屋は家から自転車で15分くらいの坂の上にある。

五月とはいえ坂道を登りきった俺はうつすらと額に汗をかいていた。そういえば一人でここ来るの初めてだな…。

今更になって緊張してきた。

店内が丸見えなガラス張り。

肝心の店員は陽が反射してよく見えない。

仕方ない、覚悟していくか。

まるで戦場にも行くような気持ちで中に入る。

「いらつしやいませー」

またも可愛い声。

店内のカウンターには二人の女の子がいた。

一人は背が届くのかと心配になってしまふ小さな女の子。

もう一人はその子より頭一つくらい大きいポニーテールの子。

二人とも、特にポニーテールの子はかなり好みだった。

「すいません、面接の連絡もらってるんですけど…」

ビビッて声は尻つぼみになっている。

情けない。

「あ、面接の方ですね。ちょっと待っててください」

そういつて一人が裏に入るとしばらくして恰幅のいいおばさんが出てきた。

嫌悪感を感じたが人当たりは良さそうだった。

「じゃあシンペイクン、そこ座って」

「え？」

いきなり客席を刺されて座らされる。

正直焦った。

普通面接つて裏に入つてやるものじゃないのか？

幸い店内に客はいなく、女の子二人の視線を受けながら面札が始まった。

内容はなんの事はない、履歴書の内容を確認する形ですすめられ、時間や日程などの都合をきくだけで後は世間話だった。

10分もしない内に面接は終わる。

「うん、それじゃあまた連絡するからね。お疲れ様」

「お疲れ様でした」

なんともいえない居心地の悪さの中店を後にする。

ちらりと店を振り返るとあのポニーテールの子が手を振っていた。やっぱりあの子可愛いな。

少しだけそんなことを思つて俺はさっさと家に帰った。

初めてのバイトの面接。

コレが彼女、みいとの初めての出会いだった。

table 2：メインキャスト

アイス屋からバイト起用の電話が来たのは面接から二週間も経った時だった。

「始めまして、シンペイです。よろしくお願いします」

予想はしていたがアイス屋は女の子ばかりだった。

小さなファーストフード店だから定員は全部で12人。

内、オーナーと店長は夫婦でパートの主婦の人が一人、あと一人だけ一つ上の男の先輩がいた。

つまり残りの八人は全て同年代の女の子。

普通ならこの状況だけで浮き足立ってしまうところなのだろう。

だが：

「シンさん！ここに入るのってシンさんなんだ！」

渡された制服に着替え自己紹介を始めるとバイトの女の子が突然声を上げた。

ぼつちやりとした肉つきに人当たりの強い話し方。

小学校が同じシヨウ子だった。

彼女が将来ゴタゴタの一端を担うことをこの時の俺は全く予想していなかった。

ただ自分本位でグイグイ前に出てくるタイプの彼女は正直得意ではないと思っていた。

「久しぶり、知り合いがいると思うとだいぶ気が楽だよ」

本心とは裏腹に笑顔で再会を喜んだ。

「シンペイくんはシヨウ子ちゃんと知り合いなんだ。じゃあいいつか。こつちのさつきから睨んでる子はミキちゃん。照れてるだけだから気にしないで」

そう目で促された先にはウェーブの懸かったショートヘアに鋭い目をした女の子がいた。

なんだかメチャクチャ睨まれてるぞ…。

なんかしたか俺？

「あの、よろしくミキちゃん」

「よろしく。一応言うけどミキ、シンペイくんより年上なんだからね」

「そうなんだ、ごめんな」

「別に謝られても困るって」

急にしどろもどろしながらミキちゃんは表に逃げてしまった。

どうやら見た目と違ってシャイなだけらしい。

じゃあシンペイ君は簡単は説明がてら教えていくから私の言うことメモしていつてね。

店長のその一言から俺のバイトは本格的に始まった。

初めてのバイトはたった数時間ながら心身共にキツかった。

特に右腕はマイナス20度のアイスを何度も球体に挟む為痙攣してしまっていた。

疲れた俺は夕方になってようやく初日のバイトが終わった。

そして入れ違いになるようにバイトに来たのは残る男のバイトの人だった。

「こんにちは、あれ？新しいバイトの子？」

ニコニコと信じられないくらい笑顔を振りまきながら大声で彼は入ってきた。

「丁度よかった。ユウくん、彼はシンペイくんね。男の子同士だし仲良くしてあげてね」

今まで見たことの無いくらいの笑顔で店長は彼に俺を紹介していた。どうやら彼は店長のお気に入りらしい。

「よろしく。シンペイくんかあ…じゃあぺえだな」

短い癖毛をオールバックにした彼はいきなりわけの分らないあだ名をつけてきた。

馴れ馴れしいな…。

ウゼエ。それにテンションが高すぎてついていけない。

「あはは…えっと、ユウさん？よろしくおねがいします」

シヨウ子に向けた笑顔より数段作った笑いで俺はユウさんに笑った。

今思えば笑ってしまう。

こんな時から俺たちは上辺だけで笑っていた。

そう、シヨウ子、ユウさん、店長、俺、そしてあのポニーテールの子。

アイス屋を巻き込んだ恋愛のメインキャストが揃いつつある。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0877a/>

小さな僕たちの部屋

2010年10月30日04時25分発行